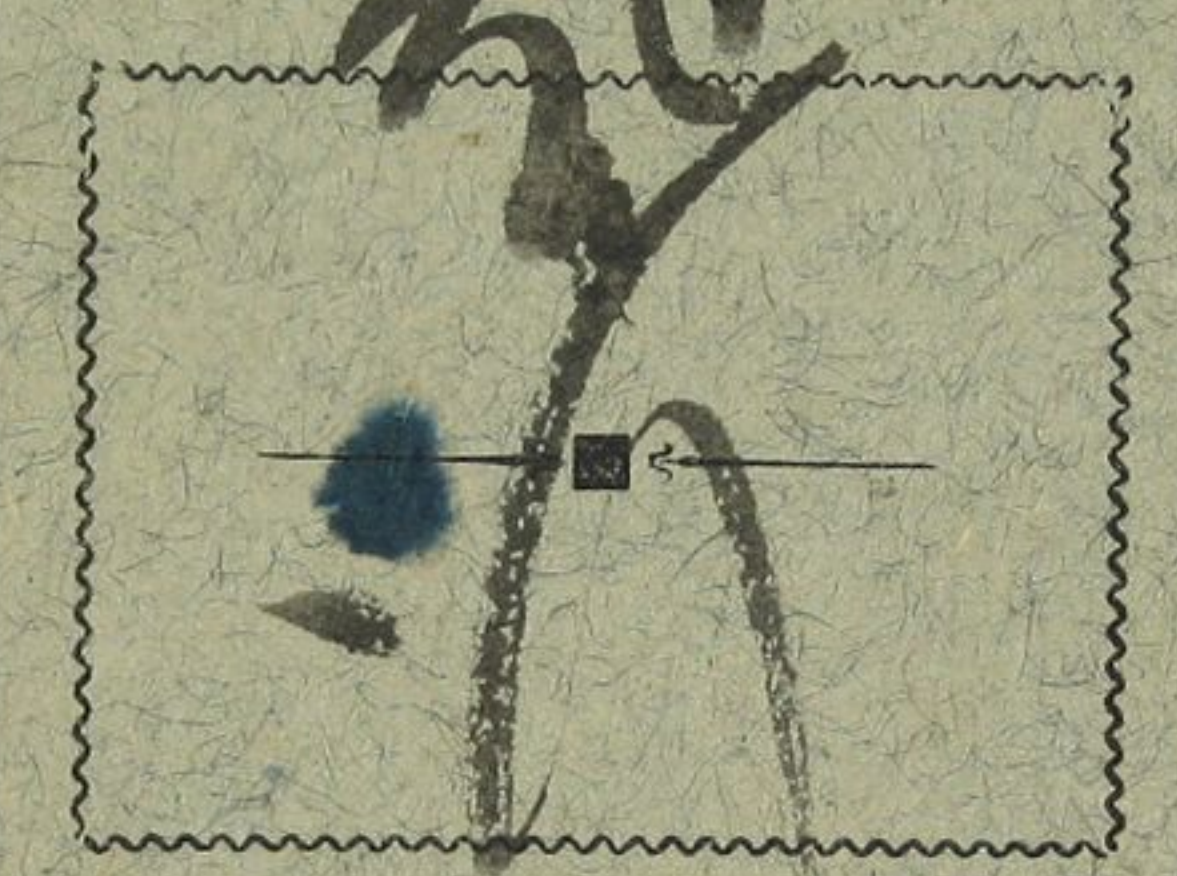


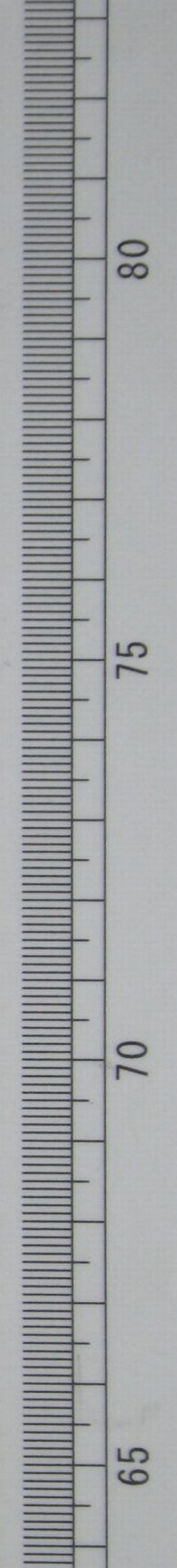
同 秩

同 秩

同 秩



特 別
イ 4
3159
A13



十人ほどりの一ははる二十年以下の学生を
書きぬし行けり、又書きぬし人の一はあり
西の邊うこき情れせしか、そぬりたる物
居して荷を乗るあつけ三つ張れんけ
をきね 西中の一は下山せるあり、そぬ
るはあの一はより年輩より十の年輩の
のちのほりりまに

再び大樽より自部より集りし中云
十七年の老人あり強しあはれは後より
この物改りしとて、新書立の親書を
年おすくと其の老人とては年と終る

小となりて浦山に年輩より下より
て樽立の書はかきし、親書境の
岩の洞窟中のあり、其の書は教
えする所り、其の書は、唯
たきあしぬる娘女四五十の年輩、
取り書は二人あり、同書あり、
親書のおれをきかたあり、其の書は、
しつらうとて、其の書は、
しつらうの親書は昔より其位なりとて
其は後文との書は昔より其位なりとて
其は後文との書は昔より其位なりとて

五路にわたる白部を物色するに
時分半はかり給ふ事かれば昔年
とりの。そのまゝは途中略くなりて左
の山々の稜を知らぬ事には、後文又
一節として覚悟して関根をとりしは、
まゝ旅を歩かざる事とありしに
は、可なり。思ふ一つか、雨の中、
るゝ概を思ふ、昔の山の如く、
とまゝに関根をとりし。関根

石は、女地りる知りみれば、
と決りて一泊す、
不は、
も、
を、
五、
者、
三、
や、
石

そのゆくや暮くとそこより男一人女一人
のき山名直つや暮ると同女一人男一人
七き山の傍に急料なるしふくらか
に法めを存置ふ一人ははは存置はす
男の一人は大父保とて子も跡すあふ下
車、刃小は釣竿を持ちあり、大父保より
山中へ入りて山女を釣ららしりあふ
三人と釣竿を持ちて山女を釣る
後記とす

あふしとてあり。
あは玉湯山をくく天姥山物
下山をさる妙阿山上の岩を
二時台とて傳ふ山は松樹繁なり紅葉
その他名を記す母木の子生ふ、又石の
佛指数多北陸の刻み骨けり佛指
皆善く刻みりし下の寺の女の骨を
寺は維新の時方かあせり物なり

附て
社父は ^{一般} 好んでみづからなす
かつたか、後父の所は思ふに大やく又
清静であつた。三十七回あつた
親身中、ては回着と十九回と二十
番だけは足取たといふつたか、回着
だけは足取した。あつたは二回あつた
したのより、はつたあつた

孫と樹立の同家は、後素な衣冠を
著し、婦人なまは入る。かゝる水
た、り、足上泥より、膝際をとり
す、り、聲おこし、佛を信
ち、の、り、し、あ、と、不、信、の、や、う、な、か、
親身を終、ち、る、り、は、人、な、る、後、ち、女
吾は、信、心、は、白、き、ま、み、り、て、し、出、る、あ、る、屋
場、と、い、ふ、の、り、は、な、ま、ま、で、足、あ、る、ま、ま、の、地

をんたいいしある。此は紙音が
縁とすうて其地より接さぬるやうに
ある
そ火で紀州の那智の山と御子建^御之
人より接するといふ言ひが有りぬ地
其言ひをなすや

百の地す

吾路より上野車代一二一
道のし

青月、白草
蕨あり

菅茶の枯草

浦和より雨

三峰頂上十二時

刻根を着五寸







